

博士學位論文要約

論文題目：『太平記秘伝理尽鈔』の思想—その構想と方法—

氏名：山本 晋平

要約：本論は南北朝の動乱を描く軍記物語である『太平記』の詞章に、兵法・政道・倫理など多様な観点から論評を行う「評」と、異伝・秘話を語る「伝」によって構成される『太平記秘伝理尽鈔』（以下『理尽鈔』と略称）の思想を考察したものである。

まず『理尽鈔』に関する解題と先行研究の整理を行い、本書の内部世界に対する検討の余地を指摘した。その観点から、本論は『理尽鈔』の内在的な分析から、本書の構想や方法を見出し、その全体像を明らかにすることを目指した。

第一章「合理的思惟の論理と構造—「理」と論評併記を中心に—」では、「理」の文脈を中心に『理尽鈔』における論評姿勢を考察した。「理」は道理とそれに対する判断（「理り」）を意味し、単に知識としての道理を学ぶだけではなく、実践的に体得して「理」に合うことが求められている。それは個別具体的な状況に「相応」することであり、事物ごとに異なる様々な条件の「相対」と「分別」や、「智」や「謀」による「工夫」により可能とされていることを論じた。こうしたあり方自体は法則的に捉えられているが（「相応」の「理」）、その内実は状況によって多様であるため、一方で「一偏」に傾いた方法の回避や事物を絶対視しない姿勢が重視される。この点から、合戦や政治などの方法に関する法則的な道理に限らず、人物評価の姿勢や中庸の肯定的評価にも通じていることを指摘した。また、取り上げた主題に複数の対立的な意見が提示される論評併記の事例を検討し、それぞれの事例において「理」を見出そうとする姿勢があることを論じた。加えて、あるべき道理（「正理」）に従うことが「道」に通じることから、「理非」の「分別」は倫理的にも重視されることを論じた。

第二章「楠正成像の造型方法」では、『理尽鈔』において最大の存在である楠正成が、いかなる方法で本書の中心軸に位置づけられているのかを考察した。第一に、「評」における兵法・倫理・政治等に関する主張（〈理論〉）と正成の言動を個別的に取り上げ、両者の対応関係を検討した。その結果、「評」の〈理論〉と正成の言動は全巻に及んで一致・連動し、それにより〈理論〉の意義と正成の存在感の双方が高められることを指摘した。第二に、全巻に散在する正成に対する評価に着目し、正成が「評」や他の「良将」から賞賛されることで、超人的な存在として位置づけられていることを論じた。その際、「神仏」に比される正成の評価は人間の資質（「才智」と「嗜ミ」）から説明され、その超人性はあくまで合理的に説明されている点を確認した。第三に、倫理や政治に関する叙述の分析から、『理尽鈔』の理想のあり方と正成との関係について検討した。正成は「道」を今の人々（為政者）に敷衍するという『理尽鈔』の目的意識に基づいて倫理や政治を語り、他者への教諭や自らの実践により「道」を体現する人物であることを指摘した。また、「無道」の今に対峙する「謀」を持ち、「古」の理想の根幹である「道」や「法」を重視する正成のあり方が『理尽鈔』の理想と結びつく点から、正成が理想の体現者であることを論じた。

第三章「楠正成の死—「謀」と「道」の間で—」では、理想の体現者としての正成を踏まえ、過失や反省、他者からの批判や「評」からの否定的評価といった「正成の人間味」を取り上げ、主に建武の新政から湊川合戦までの死に至る過程で、それらがどのような意味を持つのかを検討した。新政下の正成は、提言する「謀」の不採用により、後醍醐天皇の「御代」を守る忠義＝「道」との均衡関係が保てず、それらが過失や批判を引き起こすことを確認した。そして、正成が死を決意する契機となった坊門清忠に対する激怒は、前章で見た超人的で理想的な正成像とは大きく異なり、『理尽鈔』の主張する〈理論〉を十分に実践できなくなった姿を示すものであると分析

した。そして、「天下を治め得る新田義貞を足利尊氏に亡ぼさせるために、今死ぬ」という正成の死の論理は、「道」に殉じることで、「朝敵」に転じて天下を治めるという最大の「謀」の可能性を制限した消極的な「謀」として、「評」の賛否が分かれることを指摘した。正成の評価の相対化は、「謀」と「道」の二つの志向が共存しつつも対立していることを物語り、また、最大の存在である正成すら絶対視されない点から、厳正な論評姿勢と人間の不完全性が提示されていることを論じた。

第四章「謀略と倫理—その比重と相剋—」では、前章で論じた「謀」と「道」の問題をより本格的に位置づけるために、『理尽鈔』全体における「謀」と「道」についての用例を整理して定義づけを行い、両者の相剋関係について分析を行った。「謀」は敵味方が入り乱れる当代の才覚であり、「強」を優先し、時に「理非」をも無視して違約するという武断的な発想が見られる。一方、人のあるべきあり方としての「道」は主に「無道」に対する批判として説明され、違約せず、恩に報い、私・欲より公・義を優先することを指している。そして、「国」への「忠」が全ての「人倫」の責務とされるのも、「国家」への報恩と、乱世を「太平」に導く観点から説明されていることなどを論じた。次に、「強」や違約を是認する「謀」と、違約を「無道」として人の「義」を説く「道」が相剋する好例として、主を覆す「謀叛」をめぐる論評併記を分析し、「謀叛」が正当化されるには「道」を備えることが前提となっていることを指摘した。さらに「謀」の可否に着目して総体的に検討すると、「謀」は「道」のために行使されるべきものと考えられており、偽りも「道」のためならば是認されることを論じた。

第五章「倫理と欲望—〈聖人・釈迦「賊」論〉をめぐる—」では、「道」の倫理的価値に関わる問題として、「道」を説く聖人・釈迦は自らの渡世の方便として「五常」や「仏法」を説いた「賊」であるとする主張（〈聖人・釈迦「賊」論〉）の検討を行った。従来の研究では、聖人や釈迦も利己心と功利を免れない存在とされてきたが、分析の結果、両者を「賊」と見なす主張は他宗を批判する「末代」の「禪師」の言に限定される。また、聖人・釈迦が「道」を説いたのは、一身を利する「欲」によって苦しむ世人のためとされる点から、ここで説かれる利他の論を〈自他互助論〉と位置づけ、「賊」論と区別すべきことを論じた。また、聖人・釈迦観について検討すると、両者には共通して〈自らのためにしない〉という〈無私〉の姿勢が見られ、卓越した「智」によって世俗的な功利心や「欲」を超剋する点で、特別な存在とされていることを指摘した。そして、〈自他互助論〉が、「欲」を「智」で統御できない多くの人々を、互いに「安楽」にするために説かれている点から、本章ではこれを『理尽鈔』における「太平」実現のための具体的な方法として捉えた。同時にそれが、乱世を治めるという『太平記』から持ち越された難問に対する解答と捉えられることも指摘した。

第六章「時代認識と歴史観—「古」から照らされた「今」—」では、「古」と「今」を対比的に捉える記事が全巻に散在することから、これらを分析し、『理尽鈔』の時代認識のあり方とその役割や意義について考察した。まず、「古」とは概して聖徳太子の「法」による時代から、源頼朝が幕府政治を行う契機となった後白河院の世までを指し、それ以降の武家の世は「古」の「礼法」が破れた「無道」の「末代」と捉えられていることを指摘した。また全巻に見られる対比的な時代認識は概ねこの時代区分に対応し、「今」の世が「古」の基準から批評される形を取り、特に聖徳太子の「法」が「今」の賞罰や政治を批判する規範の役割を持つことを論じた。一方、「道」を知らない「今」の世を治めるには、「古」の規範を継承しつつも、「無道」に対応して「法」を改め、重い賞罰や「威」が重要とされることを、北条泰時や楠正成の事例から論じた。また、「御家人」を「朝家ノ武士」に再編すべきという正成の提言に着目し、「古」の武士のあり方について分析を行い、源満仲や源頼義・義家父子ら「古」の「朝家」に仕えた武士の言動が、「今」の武士に対する規範と、歴代の足利将軍に対する批判の役割を持つことを指摘した。この将軍への批判的文脈に、「朝家」の「世」を奪った源頼朝への痛烈な批判を踏まえて、『理尽鈔』が出現した慶長・元和の時代にあてはめると、頼朝に私淑したとされる将軍徳川家康に対する批判に通

じる可能性を持つことを論じた。そして、『理尽鈔』の結末の細川頼之の治世を検討し、諸大名を帰服させる「謀」を持つ一方、聖徳太子の「法」や「道」を重んじる政治を行う頼之は、正成亡き後の理想の体現者であることを論じた。以上から、『理尽鈔』は「古」の「道」や「法」に基づく世を理想とし、「今」の世に理想の「太平」を実現する方法として、「武」「威」「謀」による「無道」への対峙と、「古」の理念に基づいた「道」の敷衍を説いていることを論じ、結論とした。

最後に、各章の考察を踏まえ、今後に追究すべき課題として、より緻密な『太平記』との対照、正成関連書との比較、『理尽鈔』を受容した人物の思想の考察、成立時期における思想との比較、『理尽鈔』講釈の創始者・大雲院陽翁と法華宗との関係の追究などを挙げ、本研究の結びとした。